

杉 亨二 すぎ こうじ (1828～1917)

MENU

- 1 杉亨二のDNAを引き継いだ国勢調査
- 2 日本初の人口センサスをプロデュースした杉亨二の功績
- 3 明治・大正期におけるスタティシヤンの育成
- 4 我が国初の統計学校
- 5 杉亨二の誕生日の謎 プラスアルファ



日本の近代統計学の先駆者。父泰輔、祖父敬輔は医者。10歳の頃、孤児となり、時計師上野俊之丞の経営する上野舶来店へ奉公するなどした後、緒方洪庵、杉田成卿、勝海舟等の門下で蘭学を学ぶ。老中阿部正弘に仕え、以後、蕃書調所教授手伝、開成所教授職等を歴任。ドイツのバイエルンとオランダの統計書から西洋の統計学の存在と重要性を認識し、維新後は、明治元年（1868）駿河国に移り徳川家教授方となる。明治3年民部省出仕命じられる（7月～9月）。明治4年太政官正院大主記（政表課）、明治7年同院政表課長、明治14年統計院大書記官、明治43年国勢調査準備委員会委員を務めるなど、日本における官庁統計の創設、普及に貢献した。法学博士。

「杉さん」



令和2年（2020年）、国勢調査100年を記念して、長崎県出身である杉博士をモチーフにした「杉さん」が長崎県統計課のキャラクターに就任。

【参考資料】、【写真】：国立国会図書館HP「近代日本人の肖像」、【画像「杉さん」】：長崎県統計課提供、著作権は長崎県統計課に帰属。

【参考情報】

三田評論 2017年2月号【福澤諭吉をめぐる人々】で杉亨二の記事（福澤諭吉との関係を含む。）が掲載されています。

1 杉亨二のDNAを引き継いだ国勢調査

（本稿は総務省統計局HP「統計図書館ミニトピックスNo.13」を基に作成）

1 はじめに

明治35年（1902年）に国勢調査ニ関スル法律が公布され、明治38年に我が国で初めて国勢調査を行うこととされましたが、明治37年に日露戦争が勃発し、その影響で明治38年の法改正により、国勢調査の実施年は、勅令に委任され、事実上、延期されることになりました。国勢調査の必要性を訴求してきた関係者は、明治43年の実施を目指したものの実現せず、同年5月に国勢調査準備委員会が内閣に置かれるにとどまりました。当該委員会において杉亨二委員から出された意見を1点¹だけ紹介します。

国民の総数を重複なく遺漏なく確実に調査するはスタチスチック家の極めて困難とするところの事業にして心身を勞すること甚だ多し

2 日本初の人口調査「駿河国人別調」を実施²

杉亨二は、幕末に、統計学について、西欧の文献やオランダ留学した西周と津田真道から見聞した結果、その重要性を認識し、人口調査（国勢調査）の必要性を痛感しました。杉亨二が41歳の時、江戸幕府が崩壊し、蕃書調所（開成所）も閉鎖されました。徳川家は駿河に移封されることになり、杉亨二も徳川家に従って駿河に移住し、徳川家兵学校の教授方となりました。その当時の沼津奉行は、開成所時代に教えた阿部国之助であったため、杉亨二は阿部国之助を介して静岡奉行の中壺伸太郎に会い、領内の実情を知って政治を行うには人別調が必要であると説いて、念願の人口調査「駿河国人別調」を明治2年（1869年）5月に実施しました。「駿河国人別調」は藩の命令で2地域を終えたところで調査中止になりました。しかし、当時静岡藩仕官を命じられていた渋沢栄一の知るところとなりました。渋沢栄一は、明治政府にいた大隈重信からの要請を受け、明治2年10月には大蔵省に入省し、民部省改正掛（当時、民部省と大蔵省は事実上統合されていました）を率いて改革案の企画立案などに携わり、その際、改革のために「駿河国人別調」に取り組んでいた杉亨二を明治政府に推薦しました。

¹【参考資料】「杉亨二自叙伝」

²【参考資料】総務省統計局HP「統計の黎明とその歴史」

西暦の末尾が0と5の年に実施する国勢調査は、これを実施する年の前年10月には調査区設定が実施され、本格的に始動します。国勢調査の調査区設定は、人口を重複なく遺漏なく確実に調査するためのベースとなるものです。

2 日本初の人口センサスをプロデュースした杉亨二の功績

(本稿は総務省統計局HP「統計図書館ミニトピックスNo.28」を基に作成)

1 叙勲関係文書にみる杉亨二の功績

叙勲関係文書における杉亨二の功績の要旨は次のとおりです。

- ・日本政表を刊行、人別調(人口センサス)の実施により、官庁統計事業の基礎を築く
- ・共立統計学校を開設し、教授長として人材育成に携わる
- ・統計団体の代表として学術の研究・普及に携わる

【参考】杉亨二の叙勲の受章履歴⁵

- ・明治15年(1882年)12月 勲五等に叙せられ旭日双光章を授典
- ・明治35年(1902年)12月 勲三等に叙せられ瑞宝章を授典
- ・大正4年(1915年)11月 勲二等に叙せられ瑞宝章を授典

2 杉亨二の功績を記した叙勲関係文書(その1)⁶

杉亨二が明治35年(1902年)12月15日に勲三等に叙せられるに際しての叙勲裁可書における同人の功績を記した部分は、次のとおりです。同文書中「^{まさ}将に全国に国勢調査を施行せられんとするに当り」とあり、国勢調査ニ関スル法律(明治35年法律第49号)が官報(【参考】参照)に公布された直後のことです。

【叙勲裁可書】(筆者が原文のカタカナをひらがな表記にし、旧字体はできるだけ新字体にし、句読点、ルビ等を付しました。)

杉亨二は、少時^(幼少の時) 蘭学を修め、海外の事情を調査し、夙に^{つと}(早くから) 統計の必要を感じ、専心之を攻究し、明治二年静岡に在て藩主の為に始めて新主義の政表調べ(人口センサス)を策し、翌三年徴されて民部省に出仕し、熱心又政表の事を建議し、越て四年正院大主記に任ぜられ、日本政表及国勢要覧編纂の事に従ひ、五年政表成りて之を公刊せらる。爾来数官に歴任して権大書記官となり、数年間毎年之が編製刊行に励精せり。当時尚ほ維新草創の際材料に乏しく其の載する所国家現象の一斑^(全体の中の一部)に過ぎ

3 人口調査を行うために太政官に³

明治3年(1870年)になると、杉亨二は明治政府の民部省に出仕を命じられ、再び江戸に出ました。しかし、その職務が旧来の身分を調べる戸籍調査であったため、人口調査を行うには人々を平等に扱う必要があり、そのためには封建的な事柄を取り除く必要があると考えていた杉亨二は、意見が合わずにわずか3か月ほどで辞職して沼津に戻りました。明治4年、今度は太政官から政表(統計)の仕事で出仕を命じられ、江戸に居を移しました。そして、太政官では、ウィーン万博を視察した旧知の赤松則良から「統計学教程」(ハウスホーヘル著)を譲り受け、これによって統計学についての専門的な知識を深めました。太政官正院政表課で杉亨二は、まず、総合統計書(「日本政表」など)の編成に当たりました。

4 日本初の大規模人口調査「甲斐国現在人別調」の実施⁴

杉亨二は『現在人別の調査は根本である。國家必要なる事である、・・・』として、全国総人員の現在調査(国勢調査)を構想しました。そして、その具体的な実施方法、調査の問題点、調査経費等の大体の目途を知るため、甲斐国(現在の山梨県)において実際に調査することにしました。この調査は、「甲斐国現在人別調」として明治12年(1879年)12月31日午後12時を期して実施されました。戸籍法に基づく戸口調査が戸籍編成のために戸籍上の人を点検調査したのと異なり、この調査は、実際に住んでいる人を調査したもので、地域こそ甲斐国に限られましたが、我が国における国勢調査実施のための大切な試験調査となりました。

5 国勢調査準備委員会における杉亨二の意見の意義

冒頭で紹介した国勢調査準備委員会における杉亨二の「国民の総数を重複なく遺漏なく確実に調査するはスタチスチック家の極めて困難とするところの事業にして心身を勞すること甚だ多し」の意見は、「駿河国人別調」及び「甲斐国現在人別調」の経験に裏付けられた発言であると考えられます。

この意見は、現代の国勢調査にも通じる基本であり、国勢調査に基づく統計の信頼性は、定められた方法によるフィールドワークを担う国勢調査員等関係者の地道な努力によって支えられているということ、虚心坦懐、肝に銘じなければならぬと再認識しました。

³【参考資料】総務省統計局HP「統計の黎明とその歴史」

⁴【参考資料】同上

⁵【参考資料】：国立公文書館デジタルアーカイブ、「杉亨二自叙伝」(国立国会図書館デジタルコレクション)

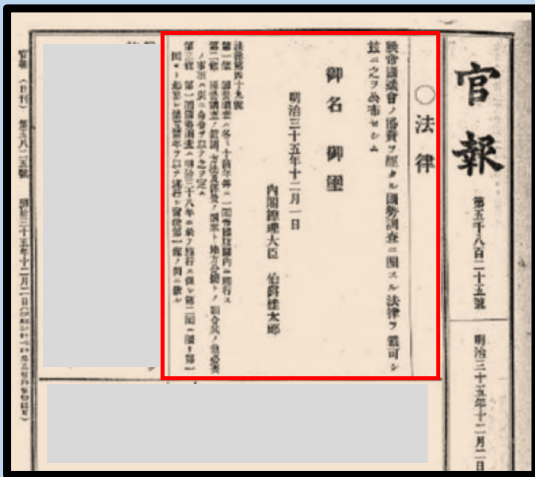
⁶ 国立公文書館デジタルアーカイブ「正五位勲五等杉亨二叙勲ノ件」

ずと雖も其の目的は漸次全国の大勢を表示するに在ること唱道せり。殊に人別調^(人ロセンサス)は其の最も熱心に主唱せる^{ところ}處にして明治十二年廟議之を甲斐国に試行することを決するや同人之を担当し、十五年に至りて完成公布せらる。是より先十四年六月統計院を置かれ、同院大書記官となり。十八年十二月廃官となり退職せり。夫れ斯の同人は、官府の統計事業創設に関し、直接^{じんすい}尽瘁^(自分の労苦を顧みることなく、全力を尽くすこと)したるのみならず、又斯学の発達に力を尽し、常に僚属を啓発し或は統計学校の教授長となりて教務を統督し、或は統計学社の社長となりて學術の研究及普及を謀り、或は統計協会等に於て統計の講話記述を為し貢献する處少からず。其の本邦官府統計事業を創設し、其の基礎を究むるに於て、同人の^{ちゆうさく}籌策^(はかりごと)与えて力あり。今や此の事業発達し、^{まさ}將に全国に国勢調査を施行せられんとするに当り、^{まさ}曩に編製したる人別調は考証上殊に有益なる材料となるに至りたる等其功績顕著なりと確認す。則ち勲等を^{ぎぎ}擬議^(さまざまに論議すること)する左の如し。

叙勲三等授瑞宝章

【参考】国勢調査ニ関スル法律（明治35年法律第49号）
【制定時】

○明治35年12月2日付け官報（国立国会図書館デジタルコレクション）



ポイント

- ・国勢調査は10年ごとに実施
- ・国勢調査の範囲、方法及び国庫と地方分担との割合は別に命令で定める
- ・第1回国勢調査は明治38年に施行。ただし、第2回は第1回の5年後に施行

3 杉亨二の功績を記した叙勲関係文書（その2）⁷

杉亨二が大正4年（1915年）11月10日勲二等に叙せられるに際し、同年10月に文部大臣高田早苗内閣総理大臣大隈重信あて上奏された文書（件名：「杉亨二外四名叙勲ニ付上奏ノ件」）における杉亨二の功績を記した部分は、次のとおりです。

【上奏文書】（筆者が原文のカタカナをひらがな表記にし、旧字体はできるだけ新字体にし、句読点、ルビ等を付しました。）

帝国学士院会員正五位勲三等法学博士杉亨二
叙勲二等授瑞宝章

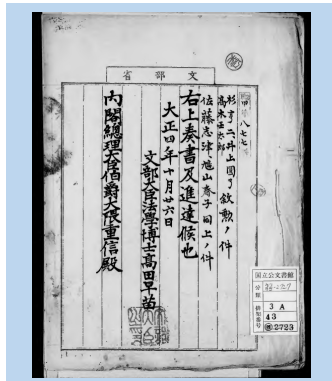
右は少にして蘭学を学び、医学を修め、緒方洪庵、村田徹斎等の塾に歴遊、し又夙に海外の事情に着目研究す。尋て幕府蕃書調所に出仕し、開成所の教授職に挙げらるるや各国の新聞紙を閲し、統計に着眼し、後和蘭の統計書を得て益々統計の必要を感じたり。然るに当時就て学ぶべき者なく僅に海外より帰朝したる諸士に就き、有六年余の久しきに亘り、学事上の討議評論に与り、又屢々専攻に属する學術の講演を為し、或は論文を寄せ以て克く其職責を尽し、學術上に裨益^{ひえき}（役に立つこと）する所鮮少^{せんしょう}（わずか）ならず。之より先、明治三年七月民部省出仕と為り、累進して統計院大書記官に至り、同十八年十二月官衙^{かんが}（官庁）改正に依り廃官と為るに至るまで十有五年余の久しき常に官府統計の重任に膺り、当時維新草創の際に属し、諸般の制度未だ備はらず其材料を得るの途亦易からざるの秋に於て自ら調査の難局に当り、其順序方法を攻究し、部下諸員を督励し、漸次完全の域に進み、以て今日の官府統計の基礎を開きたるもの其功^{すくな} 尠^か ならずと謂ふべし。加之明治九年二月「スタチスチック」社を創設し、統計の學術、事務の研究及普及を図り、後ち統計学社と改称し、今尚其社長たり。又同十六年九月共立統計学校の開設を見るや推されて教授と為り、専ら教務を統督し、生徒を指導せり。今日官府其他民間に在りて統計に従事する者は多く其薰陶を受けたるものとす。其他新聞紙に雑誌に演説に其意見を發表し、世に資益する所^{すくな} 尠^か ならず。斯くの如く統計学界の泰斗^{たいと}（その道の大家）として我邦教育及學術上に貢献したる功績^{まこと} 洵に顕著なりとす。依て今秋行はせられる御大典に際し、特に頭書の通叙勲の榮を与へられんことを茲^{ここ}に謹で奏す。

⁷ 国立公文書館デジタルアーカイブ「〔杉亨二外四名叙勲ニ付上奏ノ件〕」

概略を紹介します。

4 杉亨二の統計愛

叙勲関係文書からも杉亨二の統計愛をうかがい知ることができます。ちなみに、前掲の大正4年(1915年)10月の上奏文書は、次の画像のとおり内閣総理大臣大隈重信あてです。大隈は、統計を重視した総理の一人であり、杉亨二が在籍した統計院の初代院長でもありました。これも何かの縁でしょうか？



【画像】:国立公文書館デジタルアーカイブ

2 統計学教授所設置に関する上申書⁹

大隈重信の建議により、明治14年(1881年)5月30日、太政官に統計院が設置され、杉亨二(太政官政表課長)は、同院の大書記官に任ぜられました。

杉亨二は、「人命は短うして事業は永久なり、既に老い、日暮れて路遠ければ、學校を設立して數百名の學生を教養せんと欲し、此事を鳥尾院長に謀りしに、・・・」と、当時の院長であった鳥尾小弥太に相談の上、明治15年5月、政府に統計学教授所設置に関する上申書を提出しました。しかし、政府は統計学教授所の設置に向けたアクションを起こしませんでした。

なお、太政官正院において杉亨二の下で統計事務を担当していた寺田勇吉は、甲斐国現在人別調べの後、なるべく速やかにこれを全国で施行することの希望をもって、プロイセン王国のエンゲル統計局長に書簡を寄せ、ドイツの国勢調査に関する資料の寄贈を依頼。求めに応じて、エンゲルから送付された書類中に前述の官立のゼミナールの一件があり、日本においても官立の統計教育機関の設置の実現にむけた原動力になり、前述の上申書の提出につながったとされています。¹⁰

また、明治期に大隈重信のブレーンとして大蔵省で活躍するなどしたお雇い外国人ポール・マイエット(ドイツ人)により統計条例草案¹¹(明治14年3月)が作成され、同草案において統計学校設立に関しても提案があり、藪内武司「日本統計発達史研究」によれば「この草案もまた、統計学校の早期設立を促す大きな刺激剤となるのである。」とし、島村史郎「欧米統計史群像」によれば「杉亨二などに強い刺激を与え、…共立統計学校設置の遠因となった。」としています。

3 共立統計学校(私立)の開設¹²

統計学教授所の設置は実現しなかったため、杉亨二は、統計学校の創設を計画し、明治16年(1883年)9月に共立統

3 明治・大正期におけるスタティシヤンの育成

1 はじめに

統計研究研修所は、各府省共通の統計技術に関する研究、各府省・地方公共団体からの要請に応じた統計技術支援、ビッグデータに関する情報の収集・整理



○統計研究研修所の外観⁸

などとともに、国家公務員及び地方公務員に対する統計の基礎理論、分析等の統計に関する専門的な研修の企画及び実施などの業務を行っています。

統計研究研修所は、大正10年(1921年)に、国勢院第一部に統計職員養成所が設置されたのが始まりです。これに関連して、統計職員養成所が発足するまでの経緯についてその

⁸【写真】総務省統計局HP「統計研究研修所」

⁹【参考資料】(国立国会図書館デジタルコレクション(※国立国会図書館/図書館送信参加館限定)で閲覧可能)

・「総理府統計局八十年史稿」

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3027573/82>

・統計学教授所設置に関する上申書の内容:「統計院誌」

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3023638/17>

¹⁰【参考資料】藪内武司「日本統計発達史研究」、島村史郎「欧米統計史群像」、寺田勇吉「寺田勇吉経歴談」、総理府統計局「総理府統計局八十年史稿」

¹¹ 統計条例草案(明治14年3月):ポール・マイエット(大蔵省雇)述、相原重政・寺田勇吉合訳(総理府統計局「総理府統計局百年史資料集成 総記 上」所収)

¹²【参考資料】河合利安編「杉亨二自叙伝」、総務省統計局HP「統計の黎明とその歴史」(統計の偉人たち>杉亨二)、一橋大学経済研究所社会科学統計情報研究センターHP「統計通論」、島村史郎「日本統計史群像」、「スタチスチック雑誌」第1号

計学校（私立の学校）を開校しました。杉亨二は、自ら教授長となって統計専門家の養成に当たりました。しかし、共立統計学校は、内閣制度の大改革を引き金として、明治19年2月に閉校となりました。当初の修業期間（3年）を繰り上げて明治18年12月に卒業試験を行い、明治19年1月に卒業式を挙行。卒業生は36名でした。その中には、我が国の統計の発展に多大な貢献する人材を輩出しました。卒業生には、横山雅男、河合利安、今井武夫、水科七三郎ら我が国の統計の発達に功績を残したキーパーソンも名を連ねています。

なお、明治17年に共立統計学校生徒40余名同盟して、スタチスチック同朋会なるものを結成し、スタチスチックの学術を論談していたようです。明治19年2月に共立統計学校が開校されたことに伴い、このスタチスチック同朋会は、同年3月にスタチスチック社と合併しました。

4 共立統計学校の閉校から統計職員養成所の設置までの間におけるスタティシヤンの育成¹³

共立統計学校の閉校から統計職員養成所の設置までの間におけるスタティシヤンの育成についての概略は以下のとおりとなっています。

これをみると、東京統計協会・統計学社による統計講習会が10週間/回、内閣統計講習会が13日～34日/回、統計職員養成所が2か月～3か月/回で、これに対し、共立統計学校の修業期間は2年5か月（当初の修業期間（3年）を繰り上げ）となっており、その期間の差は歴然としています。

5 東京統計協会・統計学社による統計講習会の開催¹⁴

東京統計協会は、共立統計学校の閉校後、同校の建学の精神を維持継続することを目指し、明治32年（1899年）6月から明治39年まで統計学社との協賛によって、「統計講習会」を6回開催（講習期間：10週間/回）し、延べ817名の修了生を出し、人材育成に努めました。ただ、前掲の「日本統計発達史研究」によれば「これはあくまで講習会にとどまり、共立統計学校にみられたような体系的、学術的な統計教育専門機関としての形態ではなかった。」としています。

ちなみに、明治32年の第一回統計講習会において杉亨二が講話を行っており、その最後に「統計は学校の教育を受け、三箇年間も勉強して始めて卒業し得べき程の学業なれば

いちじょう
一場の演説、素より大意のみ、是にて^{おわ}畢りたり」¹⁵と締めくくっています。

5 内閣統計講習会の開催

内閣統計講習会は、中央、地方の統計関係職員を養成するため、大正8年（1919年）から昭和12年（1937年）までの毎年1回、計19回開催（講習期間：13日～34日/回）されました。修了者は5,501名に達しました。なお、大正13年からは、大正10年に設置された統計職員養成所の附属事業として、行われました。

6 統計職員養成所の設置

大正10年（1921年）2月（原敬内閣時代）、国勢院第一部に「統計職員養成所」が設置されました。杉亨二が発案した統計学教授所設置に関する上申書の提出から39年後のことでした。統計職員養成所の設置が実現したのは、原敬内閣において、大学令（大正7年勅令第388号）を制定するなど人材育成を重視する施政方針と整合する対応という見方もできるのではないのでしょうか。

- ・大正10年 2月～：第1回統計職員養成所
（期間：2か月間、修業生：60名）
- ・大正10年 10月～：第2回統計職員養成所
（期間：3か月間、修業生：51名）
- ・大正11年 10月～：第3回統計職員養成所
（期間：3か月間、修業生：66名）
- ・大正13年～昭和18年：第4回～第22回統計職員養成所
（期間：3か月間/回、修業生：延べ985名）

7 統計研究研修所の今後

現代の行政の分野では、証拠に基づく政策立案（EBPM）という考え方も注目され、国も地方公共団体も、それぞれ効果的な行政運営を行うためには、職員に公的統計を含むデータ（情報）を読み解く能力、つまり統計リテラシーが求められます。このため、統計的思考力やデータ分析力のより高い人材、すなわち統計家の育成に取り組むことが必要とされてきています。統計研究研修所では、教室形式の研修に加え、多くの方々が受講できる方策として、平成28年（2016年）にオンライン講座「初めて学ぶ統計」を立ち上げ、平成30年度からは、官庁データサイエンティスト育成を目標に、データサイエンスの講座の充実、EBPMの考え方も取り入れた「政策と統計」に関するオンライン講座も新設されました。また、令和2年度（2020年度）からは、オンライン講座「初

¹³ 【参考資料】 藪内武司「日本統計発達史研究」、島村史郎「欧米統計史群像」

¹⁴ 【参考資料】 総務庁統計研修所「統計研修所のあゆみ」

¹⁵ 横山雅男「杉先生講演集」に所収の「第一回統計講習会に於て」

めて学ぶ統計」をリニューアルするなどの取組みが行われました。

統計研修を取り巻く環境は、この 100 年間に大きく変化し、時代の要請に応えるべく新たな取組みが行われてまいりました。ただ、明治・大正期における統計史から、統計は、国家の統治の基本（政府統計の信頼確保の重要性を含む）であり、その人材育成の重要性については今後も普遍であると筆者は確信しています。

【別記】統計研究研修所の沿革

国勢院第一部に統計職員養成所が設置されてから現在の総務省統計研究研修所に至るまでの 100 年間の組織の変遷をみると次のとおりとなっています。

時期	記事
明治 14 年 5 月 (1881 年)	太政官に統計院設置
明治 15 年 5 月 (1882 年)	杉亨二、政府に統計学教授所設置に関する上申書を提出（統計学教授所の設置は実現しなかった）
明治 16 年 9 月 (1883 年)	共立統計学校（私立の学校）を開校（設立発起人：杉亨二、岩崎弥太郎、渋沢栄一ら有志 84 名）
明治 19 年 1 月 (1886 年)	共立統計学校卒業式挙行
明治 19 年 3 月 (1886 年)	内閣制度の大改革に伴い共立統計学校閉校
明治 32 年 (1899 年)6 月～明治 39 年	東京統計協会・統計学社による統計講習会の開催（6 回開催）
大正 8 年 (1919 年)～昭和 12 年 (1937 年)	内閣統計講習会の開催（19 回開催） ※大正 13 年からは、大正 10 年に設置された統計職員養成所の附属事業として実施
大正 10 年 2 月 (1921 年)	国勢院第一部に「統計職員養成所」が設置される。
昭和 22 年 10 月 (1947 年)	総理庁統計局の附置機関となる。
昭和 24 年 6 月	総理府の設置に伴い、総理府本府の附属機関となる。
昭和 46 年 4 月	研修対象者の範囲が行政各部門のすべての職員に拡大され、併せて名称が「統計研修所」に改められた。
昭和 59 年 7 月	総務庁の設置に伴い、統計センターの附置機関となる。
平成 13 年 1 月 (2001 年)	総務省の設置に伴い、統計局から事務の一部が移管され、統計図書館の事務及び総合統計書の編集に関する事務が追加される。
平成 15 年 4 月	統計センターの独立行政法人化に伴い、統計研修所は統計知識の普及と発達に貢献する機関として、総務省の施設等機関（文教研修施設）となる。
平成 25 年 4 月	総務省組織令（平成 12 年政令第 246 号）の改正により、統計図書館の事務及び総合統計書の編集に関する事務が統計局に移管される。
平成 26 年 3 月	総務省第二庁舎敷地内から情報通信政策研究所国分寺庁舎へ移転する。
平成 29 年 4 月	総務省統計局から統計技術の研究の事務が移管され、組織の見直しと併せて名称も統計研修所から「統計研究研修所」に改められた。

【参考資料】：総務省統計局 HP（統計研究研修所）

4 我が国初の統計学校

1 共立統計学校の設立に至る経緯等

共立統計学校の設立に至る経緯等については、前掲の「明治・大正期におけるスタティシヤンの育成」の2及び3のとおりです。

なお、共立統計学校について、国立国会図書館デジタルコレクションでインターネット公開されている資料としては、河合利安編「杉先生略伝」が参考になります（【別記1】参照）。また、「日本帝国文部省年報第11（明治16年）」に「統計学」の専門学校として掲載されています（【別記2】参照）。

2 始業式における杉亨二教授長の演説¹⁶

横山雅男「杉先生講演集」には、明治16年（1883年）9月の共立統計学校始業式における杉亨二教授長の演説は掲載されています（【別記3】参照）。その演説では、①「今諸氏は未だ開化の称を有する能はざる本邦にありて進みて此幼稚の学問を修め以て本邦の面目を一変せんと欲す。諸氏の前途は実に遠且大というべきなり。」（本邦において、この学問は未開化であり、本邦の面目を一変させてほしい。そして諸氏の前途は実に遠大であること）、②「諸氏に望む所ものは諸氏の親睦の情を損せず団結互助の体裁を永遠に維持せんこと是なり。」（諸氏の親睦の情を損わず団結互助の体裁を永遠に維持してほしいこと）、③「『スタチスチック』の要主意は所謂大数上の経験なる一語に帰するものにして、人間全社会の機軸となり其変遷活動を司どる天法即ち余の前に論述せし人生自然の規律なるものは、独り此大数上の経験によりて之を得べきものとす。」（『スタチスチック』は大数上の経験の一語に帰するものであり、人生自然の規律は、大数上の経験によって得るべきものであること）…を述べ、最後に「古 伝ふ、大邦扶桑木あり、枝葉繁蔓全州を隠蔽すと、

諸氏の堅強勇為なる精神を以てしてよく余の告ぐる所を了し**眼勉**（つとめはげむこと）怠るなくんば、余は断じて此業の良結果を見るも亦た甚だ遠きにあらざるを知る。…諸氏**須らく勉むべし**。」と激励しています。

【余談】

始業式の演説は、文字数にして4千文字を超えています。まさに熱弁であり、杉亨二教授長のスタチスチックに対する思いが伝わってきます。

3 授業科目¹⁷

授業は、毎週18時間実施され、科目は、ハウスホーヘル「統計論」（杉亨二）、エッチンゲン「道徳統計学」、モーリス・ブロック「統計論」（高橋二郎）、ワッペウス「人口統計学」（寺田勇吉）、マイヤー「社会統計学」（岡松徑）、ペ・ド・セメノー「万国統計公会決議条目」（高橋二郎）のほか、「哲学」・「倫理学」（早稲田大学講師・浮田和民）、「経済学」（和田恒謙三）、ロツシャー「経済学」（山波哲三）などがあつたとされています。

これに加え、各科統計実地演習もあつたとされています。また、科外講義として「哲学」（デニング）、ラトーゲン「貿易調査論」などもあつたとされています。

【余談】心温まるちよつといい話¹⁸

明治16年（1883年）9月に共立統計学校は東京の牛ヶ淵に開校されました。近くには東京物理学校（東京理科大学の源流）の今川小路校舎がありました。明治17年9月15日、東京は暴風雨に見舞われ、東京物理学校の校舎は全壊してしまいました。状況を見かねた鳥尾小弥太共立統計学校長（太政官統計院長）は、校舎の夜間利用を東京物理学校に提案し、翌月¹⁰月に平常の授業を再開することができたそうです。

4 卒業式における杉亨二教授長の演説

前掲の「杉先生講演集」には、明治16年（1883年）9月の共立統計学校始業式における杉亨二教授長の演説は掲載されていますが、同校の卒業式における杉亨二教授長の演説は、残念ながら掲載されていませんでした。ないものねだりの筆者は、探すことはできないと、ほぼあきらめかけていた

¹⁶ 横山雅男「杉先生講演集」（明治35年¹⁹⁰²年8月発行）（国立国会図書館デジタルコレクション）

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/898298/58>

¹⁷ 【参考資料】 藪内武司「日本統計発達史研究」のほか、次の資料

・「総理府統計局八十年史稿」第3章第7節第3項「授業状況」（国立国会図書館デジタルコレクション（※国立国会図書館／図書館送信参加館限定）で閲覧可能）<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3027573/84>

・横山正男「共立統計学校」（明治44年¹⁹¹¹年1月刊行の「統計集誌」第359号に所収）（国立国会図書館デジタルコレクション（※国立国会図書館／図書館送信参加館限定）で閲覧可能）<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1573227/77>

¹⁸ 【参考資料】 東京理科大学理窓会埼玉支部「物理学校意外史」^{連載(9)}、森野義男「講習所から東京物理学校へ」

とき、偶然、その演説が統計学社「統計学雑誌」第524号¹⁹（昭和5年（1930年）5月発行）に掲載されていることを知りました。同書の冒頭に「杉先生講演集」の発行者である横山雅男が、その卒業式の演説については原稿が見当たらなかったことから「杉先生講演集」への掲載できなかつたとし、昭和5年に麻布において開催された古書即売会で、「文明実地演説」²⁰（明治20年（1887年）3月出版）が販売され、同書に杉亨二教授長の卒業式の演説が所収されていること発見し、同書を購入し、同志にその喜びを分かち合うため前掲の「統計学雑誌」に転載することとした…とされています。ここで、明治19年1月の卒業式の演説の一部を引用します。（筆者が原文の旧字体はできるだけ新字体にし、ルビ等を付しました。）

○統計学校卒業式演説（抜粋）

スタチスチックなるものは今より凡そ五十年前に始めて世間に顕はれたるものにて他の学科より最も^の後ちに開けたれば之を若き学問と云ふ総じて世の中の事は新らしくなるほど善く古くなる悪しきものにて古きことは古きが儘^{まま}にて進むの力なく新しきことは古きを改めて新たに^{さか}發明し又工夫を加へて其功を積むが故に進むの力甚だ熾^{さか}なりスタチスチックも新しき^{びんしょう}學術なれば活発敏捷の勢ありて進む所の国にはスタチスチックの^こ學術も亦其事業も皆極めて盛なり今我邦にても有志共同のスタチスチック学校ありて其^こ學術を講究しスタチスチックの種子尚ほ茲に萌芽を^な発せり其種子尚ほ微なりと雖も既に成長して三年の美果を結びたり然れば益々之に培養を加え長大ならし之を世間開花の道に運用することならば電気蒸気鉄道よりも猶ほ大なる^な効用を国家人民に及ぼさん亨二尚ほ余力あり^{ねがわ}希くは諸君益々力を此萌芽^{つく}の培養に竭されんことを

【余談】

卒業式の演説は、文字数にして千文字程度で、卒業式の4分の1のスピーチとなっていますが、内容的には、スタチスチックの発展を力強く訴求するものとなっています。

5 閉校事情²¹

共立統計学校は、明治16年（1883年）からの第1次に続き、明治18年に第2次生徒募集を画策中、統計院廃止を引き金として、明治19年2月共立統計学校は閉校となりました。共立統計学校は私立であり、閉校と内閣制度の改革

の関係が判然とする史料が見当たらず、その閉校の背景や具体的理由については、にわかに理解できない面があることは否めないと思います。ただ、前掲の横山正男「共立統計学校」によれば「如上の官制改革は維新後最も大なるものにして統計院廃せられ新に内閣に統計局を置かれたるも院長以下共立統計学校に關係厚き諸君中多くは転任休官の厄に逢ひ学校も亦否運^{ひうん}（非運）に陥り遂に閉校するのやむを得ざるに至り」とあることから、共立統計学校の校長、教授長などは統計院の職員により運営されていたなかでの、統計院廃止・内閣統計局の発足に伴う人事異動が少なからず影響しているものと考えられます。

ちなみに、明治18年に第二次生徒募集を画策していたことをうかがわせる史料として、明治18年10月に出版された下村泰大「東京留学独案内」（東京に遊学を希望する学生向けに在京の学校68校の案内するもの）があり、同書において、共立統計学校が紹介されています（【別記4】参照）。

6 共立統計学校に対する評価

藪内武司「日本統計発達史研究」によれば、共立統計学校をして「大学統計学部として誇りうるカリキュラムならびに教授陣である。」と評価しているところですが、このほか、前掲の「東京留学独案内」によれば、同書への学校の掲載基準について「官公立ハ勿論私立ト雖モ世人ノ一般ニ優良適好ノ学校トシテ信用スル所ノモノニシテ且在学生徒ノ員数モ亦他ニ比シテ多数ナル所ナリ」としており、このことから共立統計学校に対する評価をうかがい知ることができるのではないのでしょうか。

【あとがき】

■もしも…！

もし、共立統計学校が存続していたら、大正時代に統計専門の大学となっていたかもしれません。

我が国で最初に統計専門の学部として滋賀大学にデータサイエンス学部が開設されたのは平成29年度（2017年度）です。大正7年（1918年）に大学令が制定されてから99年後のことです。

¹⁹ 統計学社「統計学雑誌」第524号：国立国会図書館デジタルコレクション（※国立国会図書館／図書館送信参加館限定）で閲覧可能 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1488065/2>

²⁰ 【参考情報】文明実地演説。前編：国立国会図書館デジタルコレクション（※国立国会図書館／図書館送信参加館限定）で閲覧可能 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/898362/33>

²¹ 【参考資料】「総理府統計局八十年史稿」

■杉亨二博士の墓前に報告したいこと

平成 29 年度（2017 年度）に滋賀大学にデータサイエンス学部が新設され、令和 3 年（2021 年）3 月には平成 29 年度入学者が卒業を迎えます。また、日本初の「大学院データサイエンス研究科」が平成 31 年（2019 年）4 月、日本

初の「大学院データサイエンス研究科」後期博士課程が令和 2 年（2020 年）4 月から滋賀大学に誕生しました。このことも、共立統計学校の開校に尽力した杉亨二博士の墓前に報告したいと思います。

【別記 1】共立統計学校に係る参考資料²²(筆者が原文の旧字体はできるだけ新字体にし、ルビ等を付しました。)

○統計学校を設立す

天下最も 貴ぶべく楽しむべきは有為の子弟を教養し国家貢献の人材を養成するに若くはなし、是を以て孟子も天下の英才を挙げて之を教育す是れ楽しみの一也と云ひ、教育を以て人間三樂の一に加へたり。先生が熱心主唱して統計学校を設立し青年教育の任に当りしもの、亦先生の理想抱負の如何に高遠なるかを指示するものなると共に、其明治文明史に貢献したる効果は真に欽慕（敬って慕うこと）すべく伝唱すべきもの多大なりといわざるべからず。

明治十四年の大政変に依って参議統計院長官大隈重信、冠を掛けて野に下るや、鳥尾小弥太氏其後を襲ふて（受け継いで）新に統計院長たるに至れり。鳥尾氏は有名なる禅学家にして又老子の愛読者なりしを以て先生等に対しても常に無為自然説を説き自ら得々としつゝありき而して先生の為に一日喝破せられたる珍談さへあり鳥尾も先生の言行に対しては窃に畏敬の情ありき。扱て先生は国家の前途を深慮して切に自ら期する処あり。真に国家永遠の業に貢献するは教育事業に在るを察し、乃ち学校創立を企て鳥尾氏に対して具さに相謀る処あり。鳥尾氏亦頗る先生の計画に賛同し、極めて助力すべきを以てしたりしかば、此に先生は愈々意を決して統計学校創設に従事したり。斯学校創立は全く先生一個人の計画にして決死の覚悟を以て是に当りしかば、政府部内の面々も皆先生の意気決心に動かされ、先づ宮内省の五百円※を首めとし統計院の有志も皆応分の寄附金を醸出（拠出）せしを以て、之を基本として九段坂下なる陸軍省用地を借り受け校舎を新築せり。先生自ら教授長の職に任じ、高橋二郎・寺田勇吉・岡松徑等の諸氏先生を輔けて諸般の任務に当れり。教授科目としてはスタチススタチスチック学二百余条を選定し、斯くて生徒募集をなしたるに、入学を請ふもの実に八十余名、三年間にして卒業せしもの三十六名、就学証明受領者二十七名に上れり、明治二十年代より今日に至る迄内閣統計局及び全国各府県に統計事務を執りしものは多く同校出身の人なり。此統計学校創設は我国文明史上には逸すべからざる関係を有し後代の範を垂れたるもの乃至国家に貢献したるの功績は真に多大なるものありき。莫遮（それはそうと）明治十八年内閣制度大改革となるに及び先生亦廢官となりて閑散の身となり、随つて学校の経営も漸く困難を訴ふるに至り、悲しい哉先生の独力を以てしては所詮維持の目算なきに至り、遂に廢校の已むなきを致せり、真に惜しみても尚ほ余りある次第なり。右統計学校出身者の姓名（いろは順）左の如し。

（統計学校出身者の姓名）略

※「宮内省の五百円」とあるのは、宮内庁「明治天皇紀」の明治 15 年（1882 年）12 月 14 日の記事によれば「東京統計協會に金五百圓を賜ひ、其の資に充てしめ賜ふ、同會は明治十二年を以て創立せらるる、我が国に於て初めて統計学を攻究し、其の發達を目的とするものなり」とあり、東京統計協會が宮内省から賜った金五百圓を統計学校の原資に充てた可能性も考えられます。

なお、前掲の「明治天皇紀」の明治 17 年 3 月 14 日の記事によれば「共立統計学校に金五百圓を賜ひ、其の資に充てらしめる、学校は麹町区飯田町に在り、明治十五年十一月有志相謀り、統計学の發達を図らんがために設立したるものなり」とあり、統計集誌第 359 号所収の横山雅男「共立統計学校」にも、「同年（明治 16 年）12 月鳥尾校長より学校維持上の特別の恩典あらんことを宮内卿に懇願（懇願）せしに翌年三月に畏くも 帝室より金五百圓を下賜せられたり」とあり、そのほか、統計学雑誌第 273 号に明治 16 年 12 月から翌年 11 月までの共立統計学校同志者醸金決算報告の記事があり、収入の部に「一金五百圓宮内省より恩賜」とあります。

これらのことから、明治 15 年の下賜は統計学校の新築に充て、明治 17 年の下賜は統計学校の維持費に充てたものと考えられます。

²² 河合利安編「杉先生略伝」（「杉亨二自叙伝」所収）（国立国会図書館デジタルコレクション）

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/980787/86>

※「杉亨二自叙伝」においても「…又宮内省よりも金員を賜つて明治十六年春、九段坂下陸軍の用地を借り受け、爰（ここ）に共立統計学校を新築した、…」と記述されています。

【別記3】始業式における杉亨二教授長の演説(筆者が原文の旧字体ではできるだけ新字体にし、ルビ等を付しました。)

○統計学校開校の辞

今や本校將に教授の緒を開かんとするに臨み敢て一言を陳べて余の丹心(まごころ)を生徒諸氏の腹中に布き、且つ聊か諸氏将来に向て宜しく注意を施すべきの要点を示し、以て此校に教授長たるの責を塞がんとす。

抑(そもそも)余の告げんと欲するものは三件に過ぎず、曰く本校諸氏を待するの情意(思い)、曰く謹(つしん)で本邦現行の条例規則を遵踏せんことを望む。曰く殊に親睦の情意を厚くし、団結互助の形体を永遠の後に維持せんことを望む、是のみ、今之を逐次左に開陳すべし。

余の今此席に臨みて机卓の間に諸氏と相見るに及び、余は実に余の予図(予め意図すること)の果して違馳(はたはせいちがう)せざるの喜びに耐へざるものあり、其予図せし所のものは何ぞや、着実沈静岐途(きとせいろ)に迷はず急躁に失せざるべき諸氏の如きものを得て相共に此業を永年の後に大成せんと欲するの情意是なり。元来此学たる其開発日尚浅く、[中国]にありては禹貢の篇(「書経」の一篇で中国の地理の書)、欧州にありては摩西の人口録(モーゼの書『民数記』に人口調査に関する記録がある…という趣旨)等の如く、生民ありて以来未だ嘗て其跡を人間の中に絶つことなしと雖も、然れども能く一学問たるの体裁を具備せしは僅に前三十年の近きにあり。是を以て方今開化の称ある欧州各国と雖も普魯士某州に在る協立スタチスチック学校の外之を講習するものなく、歐人目して幼稚の学問と云ふ。今諸氏は未だ開化の称を有する能はざる本邦にありて進みて此幼稚の学問を修め以て本邦の面目を一変せんと欲す。諸氏の前途は実に遠且大というべきなり。又諸氏は此業の一大難事たる所以を知るか、試に世間人事の変遷活動昨日の是は忽ち今日の非となり、昨年の事物は已に今年にあらざるの状を熟視せよ。人生に生、婚、死の三大関節あり、而して生に公私の別あり単胎あり、双三四胎あり、死胎あり、以て此生を始め、婚にも亦公私の別あり、再三四婚あり、離婚あり、妻死夫死の離縁あり、死に亦常変の別あり、生れて直に死するあり、夭折するあり、以て此生を終ふ只是れ一身、而して此三大関を経歴するの間に於て纏綿附着するもの件々相積みて実に数千万に至り、此個々数千万の事実を有する人生团团相群集して又数千万の多きに至り以て此人間社会を構成す。諸氏此活動の実状を目撃せんと欲せば一朝日本橋畔に赴き舟子(しゅうし)の操棹(さおを操ること)、担夫の奔走、東西相喧騰(けんとう)するの状を一見せよ。諸氏にして果して静神沈思の勞を其間に厭ふなくんば、忽ち社会経世の条緒の盤根錯節(ばんこんさくせつ)にして実に其端倪(たんげい)だも容易に判知し得べからざるの驚動(きょうどう)を感ずるものあるべし。歐人此人事の変遷を名状して坤輿の大演劇と称す。然るに此演劇たる動止必ず縁由(えんゆう)あり、進退必ず規律ありて其間に存し、人間社会の栄枯盛衰は只此規律に一遵一背(ある時は従い、ある時は背き)の間に決す。今諸氏は此人間社会を進退すべき大権力ある自然の規律を発見し、以て斯国を安きに置くの業を起こさんとす。諸氏の事業は実に繁且難というべきなり、今夫れ此遠大にして且繁難なる事業を大成せんと欲す。是等固より急躁事の失却を招き、浮薄業に倦むの徒と共に語る能はざる所にして、余の此校を興すに当り窃に憂へし所のものは偏に此点に存せしなり。然るに幸にして大抵年齒丁壮に近く、精神堅確、敢進勇為の諸氏と与に今日茲相会して此業大端を開くを得、嗚呼亦た快なり。余の喜びて措く能はざる所以と、本校の諸氏を待する所以とは夫れ此の如く、厚く此くの如く優なり。諸氏熟慮せよ。本校は諸氏を以て已に年齒丁壮にして、敢て他の檢束使令を要せざるも能く自ら其道に入るを知り、以て此大業を成就するに充分堅確なる精神を有するものなりと認めたり。是を以て本校は他の例に倣ふて懈怠罰責し退学を命ずる等の厳法を設けて諸氏を待つ如きことは一切之をなさず、又二期大試業(しぎょう)黜陟(ちゆうつちよく)法に只試験皆済・半済及び未済の三等を立て、及第・落第等の法を用いず、就学予備の科を設けて疾病其他の事故に阻せられて学業を果す能はざる諸氏の志望を満足せしむる如き、亦凡て諸氏を大人視するの意に出づるものとす、本校の諸氏を優待する情意は大抵此の如し、諸氏遠慮熟考自ら檢束(けんそく)し、果して本校の信認する所に違はず、以て余の予図する所を満足せしめよ。

次に余の諸氏に向て深く希望する所のものは諸氏の深思遠慮(じんしえんりよつしん)謹(つしん)で本邦現行の国法を遵守し、仮りにも法例の指す所と

なり、其疵害引きて本校の体面上に及ぼさしむるが如き挙動なからんこと是なり。余の諸氏を信認するの厚きを以て尚殊更に茲に之を布陳する所以のものは抑故あるなり、諸氏は勿論精神確實なりと雖其年齒よりして之を論ずれば奇を好むの一事をば蓋し未だ全く免るゝ能はざるべく、是を以て希大(すばらしく)喜ぶべきの論あり、頻々来りて之を鼓動するあらば志氣激発(激しく奮い立つこと)の余諸氏或は之に聴従し、不知不觉(知らず知らず)の間に罪科に陥る如きことなきを得んや、是れ此学を修むる上に於て障害を与ふる最大価あるものなり。余は一言諸氏に注意しをかざるを得ざるなり。所謂希大喜ぶべきの論とは何ぞや、方今(まさに今)世間に大勢力ある政談演説の如き即ち是なり。然りと雖も元来此事たる能く思想力を涵養(無理せずゆっくり育てること)せしむる等固より今日の社会に欠くべきものにあらず。是を以て今余の諸氏に注意せんと欲するも亦敢て此事を以て諸氏の頭脳に有害なりとなすにあらず。只所謂最繁至難(煩わしく、極めて難しい)と称するスタチスチック学講習の上に向て甚大なる妨害を与ふる所以の点を指示せんとす。抑此事業の最繁至難たる所以は略ぼ已に余が演述せし所の如し、是を以て其学亦只一線単条にして能く其目的を達し得べきにあらず、神学・地学の風儀スタチスチックに於ける、生理・物理二学の衛生スタチスチックに於ける、精神・歴史二学の人員スタチスチックに於ける、論理学のスタチスチック全体に於ける等、皆密着の関係あるものにして、此諸学を欠かばスタチスチックは独り能く其完全充美なる効力を逞ふる能はざるなり。今諸氏は已に能く此諸学を具備せしか、余は先般本校入学試験の結果につきて之が観察を下すに、諸氏其精神の堅強なるにも拘らず此一点に至り窃に憂懼を将来に遺さざるを得ざるものあるなり。人生の脳力は蓋し定限あり、然らば諸氏今より専心従事すべきの第一着は即ち此関係の諸学を修むるにあり。彼の政談演説の如きは要は則ち要なりと雖、諸氏の今日にとりては之を第二着の地歩に譲らざるを得ず。況んや此事たる、諸氏に対しては固より政府法例の禁ずる所にあり、若し夫れ其論説の奇大なるを喜びて所謂第一二着歩の順序を誤まり、一旦国法の問ふ所となり世人をして彼の校は罪人を出せり、罪人を出すが如き学校は信憑するに足らずとの悪評を下ださしむるに至りては、余等若干の資を擲ちて此校を起こし以て諸氏を待つものゝ甚だ快しとせざる所なり、此の如きは即ち急躁者のみ、岐路に迷ふもののみ、精神腐敗せるものゝみ、余等固に之を厚待するを好まざるのみならず、固より共に語るを喜ばず又語るに足らざるものなり、諸氏切に将来を商量して冀くは誤まるなかれ。

後に諸氏に望む所のものは諸氏の親睦の情を損せず団結互助の体裁を永遠に維持せんこと是なり。普魯士の大学生は眉間常に撲痕を存す、欧人高談し以て其活発勇悍(勇敢)なるに誇る、是れ殆んど本邦の旧時額頭の刀痕能く五百石の禄を買ふ如き武断政治の下に立つものゝ業のみ、今日にありては啻に誇るに足らざるのみならず茶席の談柄(話題)となして一笑を博するに足るのみ、何ぞ貴ぶに足らん。況んや前陳の如く実着繁密の事業を前途に期する諸氏にありては、苟くも此の如きの風習に浸染せしむること其害殆んど大事を誤るに足るものありて存するなり。諸の事業中或は孤行単立にして能く其目的を達し得るものありと雖も社会の全体に関する此業の如きに至りては、固より全社会一体に団結して東西氣脈を通じ甲乙相補助するの仕組にあらずんば其大成は得て望むべからざるものとす。而して全社会をして果して此体裁を保有せしむると否とは一に諸氏相互の親睦如何に関するべし。請ふ試みに聊か其理由を陳ぜん「スタチスチック」の要主意は所謂大数上の経験なる一語に帰するものにして、人間全社会の機軸となり其変遷活動を司どる天法即ち余の前に論述せし人生自然の規律なるものは、独り此大数上の経験によりて之を得べきものとす。而して大数云々なる語は世間多量の事実を量積し以て経験に附するの謂にして、例せば一郡は一町村より其事実の数多く、一県は一郡より多く、一国全体上に至りては又一層其多を加へ、其国人生の長短、民間経済の実状等、一郡村の経験にありては未だ其端倪をも窺見すること能はざるもの、一県上の経験に至り初めて其長たり短たり富たり貧たるを観察するを得、全国を通じて之を験するに及び漸く其实状を断定し併せて其長短貧富を生ずる所以の起因を明解し得る如き是なり。諸氏試に思へ、諸氏の各地に在りて業を執るに当り、乖離散在氣脈相通せず疎隔相関せざる如き各個孤立の形体にして、果して是等の目的を達し得らるべきか、是等の理由に至りては固より一場の談話の能く尽くす所にあらざるを以て、其詳細は勿論教授の際に譲らざるを得ずと雖も、近く之を警うる

に某の地に一叢竹あり、測者其総竿を計測し平均尺の他に比して伸長せるを見、初めて此地竹植に適せりと断言し得るが如し、然るに此際測者東叢に在るものは其測る所を以て之を西端に報ぜず、甲者は乙に聞かしむるを好まず、乙者は丙に語るを嫌うが如きことあらんには、此地の経験は到底其結果を見ることなく、其勞して得し所のものは、竹木雜植交々相害し両ながら失ふて止むが如きの愚計に出づるを免れざるべし。復た笑ふべきのみ、諸氏にして一旦乖離孤立の失体に陥らば、其結果亦唯此の如くにして止まんか、諸氏の親睦は實に此業終末の結果に大關係あり。諸氏 冀くは此理を了し、長く團結互助の体を維持し以て此業を大成せよ、諸氏の前途は決して孤立単独にして成るべきものにあらざるなり。

余の殊に諸氏に告げんと欲せしものは大略右の如し。古 伝ふ、大邦扶桑木あり、枝葉繁蔓全州を隱蔽すと、諸氏の堅強勇為なる精神を以てしてよく余の告ぐる所を了し罷勉(つとめはげむこと)怠るなくんば、余は断じて此業の良結果を見るも亦た甚だ遠きにあらざるを知る。諸氏全く本校の業を卒はるに及び本校を以て其根基となし、諸氏枝となり葉となりて我が八十餘国の事実を網羅すること猶扶桑木の六十餘州を影蔽滋潤するが如くならば、豈亦一大快事ならずや、諸氏 須らく勉むべし。

百三十

幾何○八線原理○級數○平三角原理○孤三角實算式

三 級

代數四則○一次方程式○對數○平三角二次方程式○幾何

四 級

四則○開平○比例○開立

○方圓社

本社ハ數學ノ専門及諸官立學校へ入校スルノ受験科ヲ教授ス

麹町區五番町

一東脩 金五十錢

一月謝 金六十錢

○共立統計學校

九段坂下

此統計學校ハ專ラ有志ノモノヲ募リ學期ヲ定メテ統計學ヲ教授スル所トス(但シ官吏等ニシテ生徒ノ資格ヲ有セズ此學ヲ請セント欲スルモノハ設置規則第六節ニ從フヘシ)

一入學ノ生徒ハ入學金一圓月謝三十錢ヲ納ムヘシ修學ノ年期ハ約示二年半トス

第一 統計學理論

第二 人員統計學

第三 經濟上統計學

第四 社會及政治上統計學

第五 風俗統計學

第六 各科統計實地演習

○東京物理學校

本肆坂下
神田小川町

本校ハ物理ノ學ヲ闡弘スルヲ以テ目的トシ中等ノ程度ニ準シテ物理學及ヒ初等數學科ヲ教授シ傍ラ化學星學二科ノ大意ヲ教ユルモノトス毎科適宜ノ邦文教科書ヲ用ヒ物理學化學ノ二科ニ於テハ專ラ實地試驗ヲ行フヘシ

卒業期限 二學年

百三十一

5 杉亨二の誕生日の謎プラスアルファ

(本稿は総務省統計局HP「統計図書館ミニトピックス 号外「杉亨二の誕生日の謎プラスアルファについて…！」を基に作成)

1 はじめに

統計図書館ミニトピックス No. 30「統計報告書でみる我が国でのスペイン風邪の被害状況」において、歴史人口学者の速水 融^{はやみあきら}先生が超過死亡の概念を用いてスペイン風邪による死亡者数の試算したことについて紹介する原稿を書き終えた頃、杉亨二博士^{すぎこうじ}の誕生日が話題となり、史料などを調べてみましたので、これに関連するエピソードを紹介します。

2 杉亨二の誕生日の謎

インターネットで公開されている公式文書を見ると、叙勲関係文書に添付されている履歴書においては、文政11年8月生まれ(日付の記載なし)とされているものと文政11年6月15日生まれとされているものがありました。また、国立国会図書館HP「近代日本人の肖像」では文政11年10月10日(1928年11月16日)とされていました。ここでカッコ書は太陽暦に変換したものと思われる。

総務省統計局HPをみると、最近まで、8月2日(太陽暦9月10日)とされ、文献をみると、6月15日(太陽暦8月2日)、8月(日付明記なし)、(太陰暦)10月10日とするものなどがあり、区々でした。文献等によっては、戸籍で生年月日が10月10日であることを確認したとするものもありました。ただ、法的には、戸籍上の生年月日が正しいと思いますが、戸籍と生年月日が異なる文献等に

ついて、その理由を知る術もなく、太陰暦から太陽暦への換算しているものも散見されますが、そもそも原資料が太陰暦なのか太陽暦なのかが確認できない面もあり、真相は分からないことが分かりました。(【別記】参照)

3 速水融「歴史人口学で見た日本」における杉亨二の評価

杉亨二博士のプロフィールを調べる過程で速水先生の著書「歴史人口学で見た日本」に出会いました。同書において「人口統計の確立者・杉亨二」の見出しがあり、その冒頭は「ところで、私の考えでは杉亨二こそ、日本における人口統計の確立者であった。」で始まり、「杉亨二の偉いところは、明治維新の最中、五稜郭のあたりでは鉄砲の撃ち合いさえやっているときに、彼が学んだ方法を使って、静岡県下のいくつかの町で国勢調査を行ったことである。」
「現在、沼津とその隣の原という二つの町の調査記録が残っているが、それを見ると、江戸時代のものとは違って、身分別などという項目は一切なく、そのかわりに職業別であるとか、結婚しているとかしていないとか、われわれにとって決定的に大事な人口統計の要素が盛り込まれた調査になっている。そのような調査を、彼は早くも明治元年、二年という段階に実施した。」とされ、杉博士を高く評価し、敬意を表しています。

4 奇しくも・・・

日本の歴史人口学研究の第一人者である速水先生は、令和元年12月4日にお亡くなりになりました。奇しくも我が国で初めて人口センサスをプロデュースした日本近代統計の祖である杉亨二博士の祥月命日に当たります。

【別記】杉亨二博士の生年月日

	生年月日 (赤：陰暦、青：陽暦)	備考	
【公式文書】(インターネット公開)			
11	国立公文書館デジタルアーカイブ 叙勲裁可書【添付の履歴書】 件名：「正五位勲五等杉亨二叙勲ノ件」	文政十一年戊子八月 (仰裁文書の日付) 明治 35 年 12 月 13 日 ※明治 35 年 (1902 年) 12 月 15 日に 勲三等に叙せられるに際しての叙勲 裁可書	
12	国立公文書館デジタルアーカイブ 上奏文書【添付の履歴書】 件名：「杉亨二外四名叙勲ニ付上奏ノ件」	文政十一年六月十五日 (上奏文書の日付) 大正 4 年 10 月 16 日 ※大正 4 年 (1915 年) 11 月 10 日勲 二等に叙せられるに際し、同年 10 月に文部大臣高田早苗内閣総理 大臣大隈重信あて上奏された文書	
13 ★	国立国会図書館HP 「近代日本人の肖像」	文政 11 年 10 月 10 日 (1828 年 11 月 16 日)	
14 ★	統計資料館「杉 亨二 大隈重信」パンフレット (年表)	文政 11 年 (1828) 肥前国長崎 (現：長崎県長崎市本籠町) に生まれる (8 月 2 日)	【注書き】 ※明治 4 年以前は太陰暦である が、西暦の年号は単純に読み替え たものを参考として表記しまし た。 参考文献：島村史郎「日本統計史群 像」
15 ★	総務省統計局HP (統計資料館) 「杉亨二の来歴」	【現行】文政 11 年 (1828 年) 肥前国長 崎 (現在の長崎県長崎市) で生まれる。	【修正前】文政 11 年 8 月 2 日 (1828 年 9 月 10 日) 肥前国長崎 (現在の長崎 県長崎市) で生まれる。
【文献】			
21	国立国会図書館デジタルコレクション 「東京学士会院会員杉亨二先生略伝」 (「東京学士会院雑誌」第 21 編之 4 所収) 明治 32 年 (1899 年) 4 月	文政十一年六月十五日	
22	「統計學社々長杉亨二先生略傳」(「統計学雑誌」159 号所収) 明治 32 年 (1899 年) 7 月	文政十一年六月十五日	前掲の「東京学士会院雑誌」から掲 載した旨の注書きあり
23	花房直三郎「本會名譽會員法學博士杉翁ノ勲等陸叙ヲ 賀ス」 (「統計集誌」418 号所収) 大正 4 年 (1915 年) 12 月	文政十一年八月	
24	「統計学雑誌」378 号 ①冒頭部分 (横山雅男) ②田中太郎「杉亨二翁略伝及事績」 大正 6 年 (1917 年) 10 月	①本年八月二日 (陰暦六月十五日) は余 が恩師杉先生九十の初度に当たるを以 て… ②文政十一年八月二日	※陰暦に換算すると 7/26 に
25 ★	国立国会図書館デジタルコレクション 「杉亨二自叙伝」 大正 7 年 (1918 年)	(履歴書) 文政十一年戊子八月生	
26 ★	国立国会図書館デジタルコレクション 加地成雄「杉亨二伝」 ① (3 頁) (二一イ)「正しい生年月日」 ② (153 頁) 年譜 昭和 35 年 (1960 年)	①文政十一年十月十日 ②文政十一年一〇月一〇日	加地が総理府統計局八十年史編集 主任のとき戸籍謄本で確認した旨 記述あり
27 ★	スタチスチク復刻版 別冊 細谷新治「スタチスチク解題」 ① (21 頁)「杉先生小伝」 ② (127 頁)「杉先生略年譜」 昭和 55 年 (1980 年)	①文政十一年(一八二八)十月十日 ②文政十一年(一八二八) 十月十日長崎市本籠町に生まれる	(年譜)「明治 5 年以前は陰暦によ る」との注書きあり
28 ★	日本統計協会 完全復刻「杉亨二自叙伝」 平成 17 年 (2005 年)	(履歴書) 文政十一年戊子八月 (年譜) 文政 11 年 10 月 10 日	(年譜) 目次で 27 の文献から転載し た旨の注書きあり
【その他】			
31	国立国会図書館デジタルコレクション 人事興信録. 4 版 大正 4 年 (1915 年)	文政十一年十月十日	

注：★印は、杉亨二博士の没後作成された文献等であり、いずれも没年月日が 大正 6 年 12 月 4 日となっています。